

Kyorin Heartbeat

杏林医学部メールマガジン



1月元旦の杏林大学正面玄関 門松の奥には発熱外来のプレハブ建物

新年明けましておめでとうございます。

本年が杏林医学にとって、兎年に因んで飛躍の年になりますように、よろしく願いいたします。年末年始にかけてもコロナ禍は沈静化せず、病院長や倉井先生をリーダーとする感染対策のご指導と対応の下に、病院や医学部機能が支えられています。各診療科や各部署の皆様には、専門領域の業務と感染症対策のバランスに悩むことも多いと存じますが、お互い協力し合って、この困難を患者ファーストの選択ができるように乗り越えていきましょう。よろしく願いいたします。

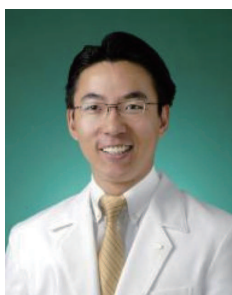
(平形明人)

国際交流が人生を豊かにする (3) 岸本暢将准教授	2
教室探訪 (7) 呼吸器内科学教室	6
データサイエンス教育研究センターの紹介	9
令和4年 医学部6年生を対象とした教育要求分析	12

国際交流が人生を豊かにする (全4回)

第3回 臨床留学を見据えた日本での研修医時代

腎臓・リウマチ膠原病内科 准教授 岸本 暢将



略歴

1998年 北里大学医学部卒業

2000年 沖縄県立中部病院初期研修終了

2000～2001年 在沖縄沖縄海軍病院インターン

2001～2004年 米国ハワイ大学内科レジデント

2004～2006年 米国ニューヨーク大学

リウマチ膠原病科フェロー

2006～2009年 亀田総合病院

2009～2019年 聖路加国際病院

2019年 杏林大学医学部赴任

米国・日本総合内科・リウマチ膠原病内科
専門医

1. W杯「欧州組」快進撃導く～新時代見せてくれた～

サッカーのワールドカップ（W杯）カタール大会で日本がW杯優勝経験のある強豪ドイツ、スペインを下して16強入りした。日本がW杯に初出場した1998年のフランス大会では、全員がJリーグのクラブ所属であり、欧州のサッカープロリーグ所属の「欧州組」と呼ばれる選手はいなかった。今回W杯日本代表メンバー26名のうち、「欧州組」は過去最多の19名。言葉ばかりでなく、体格や風貌に圧倒されていた24年前とは全く異なり、海外経験によって相手に対する必要のない緊張をせずに自分自身および相手の良い点、悪い点を理解することで、自分の力を堂々と発揮できた結果であると感じた。この出来事でさらに国際交流の重要性を再認識することとなった。

2. 初期研修では自己目標を立てる

M6でUSMLE Step1とStep2 CK試験に合格。CSA(OSCE試験、現在Step2CS)受験に際しては英語での病歴聴取、身体診察のトレーニングが必須であるため、卒後3年目には米国海軍病院 (US.Naval Hospital: USNH) 受験を念頭に、沖縄県立中部病院 (Okinawa Chubu Hospital: OCH) での初期研修がはじまった。初期研修は、自分が勉強したことを即実践、上級医に気兼ねなく質問できる環境であり、病歴聴取・身体診察からグラム染色まで多くの基礎技術を習得することができ、充実した毎日であった。これはいずれの研修病院でも可能であるが、**初期研修では自己目標を立てることが大切であると考えている**。私の場合、1年目の全科ローテーション期間中において、例えば消化器内科のローテーションでは、ワシントンマニュアルの消化器分野のところは全て熟読し実践。健常者と消化器疾患を持つ患者の違いを、どのようなことに注意し問診するか、身体所見を取るか（特に消化器内科ローテーション中は腹部所見）について正書 [ベイツ診察法 (メディカルサイエンスインターナショナル) や診察マニュアル (編: 黒川清, 南江堂) を参考に、初期研修1年目は、すべての科で内科疾患の診断に重要な問診項目と身体診察を取れるよう努力した。2年目は内科のローテーションであったが、できるだけ1年目のインターンへの教育を心がけ、空き時間にはインターンとハリソン内科学を一緒に読みながら指導を行った。上級医・指導医には何でも質問し、回診を有意義なものにするよう心掛けたが、焦りすぎて、少し考えてからに質問するように、と、外科の先生に怒られたこともあった。

3. 置かれている環境で自分のできる最大限の努力を

OCH では初期研修当時、毎年米国より権威ある指導医が、短期で1週間（年間5～6人）、長期で3ヶ月（年間1～2人）来日していた。専門は様々であるが、小児科では正書であるネルソン小児科学の消化器のパートを執筆しているような教授が訪れたり、内科ではハーバード大学やメイヨークリニックから来られたりと大変恵まれた環境であった。この環境をいかすべく、指導医の講義にはできるだけ参加し、講義では最低でも1つは質問をするよう心掛けた。ディスカッションも行い積極的に交流を持つようにして、簡単に自分が米国医療に大変興味があり、日本での研修終了後、米国臨床研修を行いたいということも話すようにしていた。そして機会があれば“目的達成のために、OCH 初期研修終了後に USNH での研修を希望しており、受験を行う際の推薦状の依頼をしたい”とお願いをすることもあった。その結果、初期研修を開始して約1年半後、USNH インターン選抜試験受験時には、6人の米国指導医から有難く推薦状を頂くことができた。その推薦状は後々の米国内科レジデント選考の願書にも使用した。

4. 日常英語のトレーニングとモチベーションの維持

英会話の個人レッスンにも1-2週間に1度、勤務終了後の夜や休日に通っていた。USNH のインターン選抜試験の面接対策、初期研修中受験した米国財団法人野口医学研究所が行っていた米国短期留学制度の選抜試験の面接対策も併せて行った。前述の推薦状の取得や面接対策を事前に行っていたことで初期研修終了後、在沖縄 USNH のインターンに採用された。日本での研修期間中には、公益財団法人日米医学医療交流財団や、米国財団法人野口医学研究所が年に数回主催していた米国臨床留学セミナーに、情報交換やモチベーション維持のためにできるだけ参加し、同じ目標を持つ医師と交流し、米国臨床研修を経験されたセミナーの講師からも多くのアドバイスをいただいた。さらに OCH での初期研修の2週間の休暇を利用して、来日した指導医の所属する米国の病院にも短期研修に行く機会も得た。外国医学部卒業生にとっては、米国で臨床研修を始める前に、米国の臨床研修病院で、短期間でも臨床経験があるという事例は非常に重要であり、履歴書（CV）にも記載することができる。杏林大学でも M6 の学外研修期間に短期留学制度があり、令和5年から私もリウマチ専門医フェローシップを行ったニューヨーク大学も留学が可能になったので、ぜひ積極的に応募していただきたい。



5. 日本にしながら米国医療システムを経験できる USNH 研修

私が研修した沖縄以外でも横須賀の USNH、米国横田基地において日本人インターンを毎年募集している。この3施設での1年間のインターン研修は、日本にしながら米国医療システムでの研修を経験できる機会である。具体的に米国臨床留学を検討している方にとってのメリットは、以下1～6がある。

1. 生きた英語を学ぶことができる。実は、実際の現場では医師同士の専門用語は患者さんに理解されず、より砕けた口語表現を使用する必要がある（例えば痰は Sputum というが、口語表現では、phlegm という）。さらに指導医の企画するホームパーティなどに参加、異文化交流を通してコミュニケーション向上につながる。
2. 症例プレゼンテーションの訓練ができる。米国では幼児教育から人前での発表を頻回に行なっており、プレゼン能力が非常に高い。一方、日本では人前で発表する機会も少ないためプレゼンの仕方、つまり今起きている問題をどのように、短時間で、簡潔に相手に伝えるかという能力を学ぶ機会は少ない。自分で診察した患者さんについて、主訴、現病歴、既往歴、身体所見、検査データ、アセスメント・プランを短時間で繰り返し指導医にプレゼンするための訓練となる。これは、ハワイ大学研修医時代に指導医に言われたことがあるが、いくら勉強をしていて、病気のことを良く知っていても、プレゼン（相手に伝える能力）が下手だと、患者さんのことをよく理解していないと勘違いされるそうである。
3. 臨床実地試験である USMLE Step2 CK や英語資格試験 TOEFL 等受験準備には最適で、USMLE Step1&2CK 受験準備のための自習時間も確保できる。
4. 在沖縄 USNH では1か月間海外研修を行うことができる。
5. 推薦状を USNH 指導医から取得でき、必要書類や面接に当たり多くのアドバイスを得られる。
6. 1年間の研修は、米国での臨床経験としてカウントされ、履歴書に記載できる。

USNH の具体的研修内容は、4年制米国医学部の3年生と同様の研修を行なうことができる。具体的には、1ヶ月おきに各科ローテーションを行うが、毎日早朝7時のモーニングレポートから始まる。研修中は救急室当直を6日に1度行なう。モーニングレポートでは当直明けのインターンが症例プレゼンを行い、問題解決アプローチ、鑑別疾患の立て方を学び、必要最小限の検査、初期治療にいたるまで、指導医とともに約30分かけて1症例につきディスカッションを行う。これは米国臨床研修では毎日行なわれている指導体制であるが、研修医には最高のトレーニングとなる。さらに、急性心筋梗塞など、緊急に治療が必要で、USNH では対応できない治療の場合(例. P T C A , C A B G など)、近隣の病院に患者さんを搬送するが、その際、米国人医師や基地内の患者さんと近隣病院のスタッフの円滑なコミュニケーションをお手伝いするのも日本人インターンの重要な任務であった。



ホームパーティにて USNH 米国医師らと



USNH Okinawa インターン終了式
ベストインターンに選出された

6. 米国内科レジデンシープログラムへの応募と ハワイ大学内科レジデントとして勤務開始

当時は、USLME Step1&2、英語試験 TOEFL(基準あり)に合格し、臨床実地試験(CSA)に合格すると米国臨床研修が行える ECFMG Certificate を取得することができた。しかし、Certificate を取得したからといってレジデンシープログラムに入れるわけではなく、次の関門として、全米および世界中からアメリカンドリームを求めて各プログラムに多くの応募があり、書類選考をクリアして、面接に行き、レジデンシープログラムに採用してもらわなければならない。最終的に何処のポジションを得るかは、日本同様 NRMP という組織がおこなうマッチングで決まる。ちなみに、私が内科研修に応募した 2000 年度の場合、内科レジデンシープログラムは、大学病院及びその関連病院プログラム、あるいは市中病院のプログラムと大きく 2 つに分かれるが、計 400 以上あり、内科レジデントのポジションは約 9000 名。そのポジションに倍の約 2 万人の応募があった。応募者の約 40% (8000 人) が IMG(外国医学部卒業者)であったが、IMG 全体の約 4 割がマッチした。IMG には狭き門である。例えば、私が研修したハワイ大学では、毎年 16 名の内科レジデントのポジションに 200 人以上の応募があり、USMLE のスコアで足切り書類選考の後、70 人前後面接選考を行っていた。私は幸運にも USNH での海外研修期間、米国財団法人野口医学研究所の短期留学生として採用いただいていたので、1 ヶ月間ハワイ大学内科で短期研修を行い、その間ハワイ大学の内科レジデント選考面接も行っていただきポジションを何とか獲得することができた。



ハワイ大学内科レジデンシープログラム同期

次回(最終回)では、ハワイ大学内科レジデンシー、ニューヨーク大学でのリウマチ膠原病科フェローシップについてお伝えし、国際交流として現在も行っている国際共同臨床研究についても触れてみたい。一つづー

教室探訪(7) 呼吸器内科学教室

多摩地区の診療の根幹を担い 後輩医師の指導・育成に取り組む

呼吸器内科 医局長 石田 学

「呼吸器内科」という診療科における醍醐味とは？

一般的に「呼吸器内科」という診療科は、どのようなイメージでしょうか？多くの人は「呼吸器領域で特に内科疾患を担当する科」というイメージを持ち、肺炎や喘息、近年では新型コロナ感染症などを担当していると想像されることでしょう。

勿論、それは間違いではありません。上述した疾患群は実際に呼吸器内科で担当していることがほとんどです。しかし、患者自身が「私は肺炎です」などと言って受診することはあり得ません。多くの場合、患者が咳嗽・喀痰・呼吸困難などの呼吸器症状を訴えたり、健康診断などで偶発的に「肺の異常影」を指摘される等で呼吸器内科を受診します。その上で想像して頂きたいのですが、例えば「咳嗽」であったり、「肺の異常影」であったり、その情報のみでどんな呼吸器疾患が原因であるかを瞬時に診断することが出来るのでしょうか？答えは、否です。なぜなら、それらの呼吸器症状や胸部異常影を呈する呼吸器疾患が、呼吸器感染症としての市中肺炎、気管支喘息などのアレルギー性疾患、肺癌などの悪性腫瘍、びまん性肺疾患としての間質性肺炎など、多岐に渡るからです。結果的に、「咳嗽はいつ起きやすいのか、他にどんな症状があるのか」「すりガラス影なのか、浸潤影なのか、陰影の分布はどうなのか」「呼吸器領域以外の身体所見はどうなのか」といった更なる情報の収集が非常に重要となってきます。例えば、胸部X線を例に挙げると、一見すると情報量が少ない検査かと思われがちですが、きちんと読影すれば、多くの情報を得ることが出来ます。その様にして情報を積み重ねることで、診断に迫っていくのです。

つまり、「呼吸器内科」とは、ある呼吸器症状や胸部異常影などから複数の鑑別疾患を思い描き、鑑別に必要な検査を施行して情報を積み重ね、最終的に一つの確定診断に辿りつくという、「診断学」の側面を強く持つ診療科であると言えます。必然的に、呼吸器領域のみではなく、全身の内科領域の知識も求められます。診断までの道りは困難なこともあります。診断をつけ、その治療によって患者の病態が改善した際の達成感は計り知れないものがあり、他のメジャー内科にはない、呼吸器内科としての醍醐味であると言えます。

当教室の雰囲気や在籍医師の専門分野

その様な呼吸器内科ですが、当院の呼吸器内科学教室は非常にアットホームで良い雰囲気を脈々と受け継いでいます。その理由の一つに、杏林大学だけではなく他大学出身の医師が多く在籍していることが挙げられます。2022年度の当教室には31名の医師が在籍しており、4人が大学院に在籍し、2人が女医復職支援枠での勤務を行っています。その中で約半数が他大学出身ですので、杏林大学出身でなくとも馴染み易い教室です。

また、そんな教室の顔である主任教授の石井教授およびその右腕である皿谷准教授の存在も、当教室の良い雰囲気の根幹を支えてくれている大きな理由の一つです。

石井教授はびまん性肺疾患に精通し、その中でも肺胞蛋白症を専門分野とされており、特に続発性肺胞蛋白症においては第一人者です。また教授とは思えぬ程の臨床能力を維持されており、びまん性肺疾患だけでなく、幅広い分野の知識を常にアップデートされています。更に、医局員を含めた後輩医師の指導に非常に重きを置かれており、例えば医学生に自身の腕で採血をさせてあげる、といったユーモアも持ち合わせた優れた指導者です。

皿谷准教授は呼吸器疾患のみならず内科全般に幅広い知識を持たれています。呼吸器領域では、特に聴診所見に精通されており、皿谷准教授の「肺音道場」を知っている医師は少なくないでしょう。また、胸部のみならず全身の身体所見の取り方にも精通されており、そこから導き出される鑑別疾患の数々には驚嘆する程です。また、石井教授と同様に、皿谷准教授も指導者として優れており、医学生に行われている身体診察の講義はとてもユニークで、医学生からも常に高評価です。



医学生に自らの腕を差し出す石井教授



皿谷准教授による胸部診察のクルーズ

その下には当院の肺癌を一手に引き受けている高田講師や COVID-19 感染症を最前線で指揮している中本助教がおり、とても層が厚い教室であると言えます。病棟医に関しては、6 人のオーベンを柱とし、医員および専攻医達が日々切磋琢磨し、病棟業務を支えています。彼らを主体とし、上級医の指導の下で、多くの医局員達が海外を含めた学会発表や英語での論文執筆なども誠意的に行っています。

また、当院では気管支鏡にて気管支肺胞洗浄を年間約 100 例施行しており、そこで採取した気管支肺胞洗浄液を用いた臨床研究に、大学院生が日々取り組んでいます。私（筆者）も微力ながら、東京都で全肺洗浄を施行する責任医師として、日々精進しています。



東京都で肺胞蛋白症グループとしての拠点



気管支肺胞洗浄液を用いた臨床研究

23 区外の唯一の大学病院 (本院) としての気概

当院が 23 区外で唯一の大学病院 (本院) であることから、必然的に当教室が担当する医療圏は広範囲に渡っており、担当する患者数も非常に多くなっています。市中肺炎・気管支喘息・慢性閉塞性肺疾患 (COPD) などは元より、間質性肺炎などのびまん性肺疾患も多く担当しており、間質性肺炎全体では年間約 150 例もの入院実績があります。特発性間質性肺炎の疾患動態を診た本邦における他施設共同研究 (Japanese Idiopathic Interstitial Pneumonias Registry: JIPS レジストリ) では、当院から 20 例の症例登録を行っており、23 区外で唯一の疫学調査に参加している大学病院となっています。また、当院はがん診療連携拠点病院であるため、数多くの肺癌患者を担当しています。高度医療機関でもあるため、稀少肺疾患や重症の COVID-19 感染症も数多く担当してきました。その結果、当教室は幅広い呼吸器疾患を数多く経験することが出来る環境となっています。

当教室が目指す今後の方向性

その様な当教室ですが、とても嬉しいことに、2023 年度からは 10 人もの新入局員を迎えることが出来ました。一人一人がとても頼もしい医師ですので、当教室としても大いに期待しています。それぞれの先生達が自分達の意志で当教室への入局を決定してくれたことは、我々の方向性が間違っていないことを暗に示していると感じています。

当教室のみならず、呼吸器内科医を増やしていくことは極めて重要ですので、今後も多摩地区の呼吸器内科をリードする存在として、精進する教室を目指します。



2023 年度の新入局員 10 名



当教室の医局員集合写真

最後に

当教室に興味を持たれた先生方は、是非当教室のホームページに足を運んでみて下さい。先生方と共に呼吸器内科医として仕事が出来ることを楽しみにしています！

【あんずの呼吸】

<https://resp-kyorin.jimdo.com/>



データサイエンス教育研究センターの紹介

データサイエンス教育研究センターが始動しています。医学部の研究や統計解析の相談にのっていただけます。本号では、同センターを密接に感じていただけるように、所属する先生方に自己紹介をお願いいたしました。(平形明人)

データサイエンス DS 人材の育成 研究の推進

データサイエンス 2022 教育研究センター 10/1

Center for Data Science Education and Research

DSセンター3つの役割

OPEN

教育 | 学部横断的データサイエンス教育の普及・促進

- ・数理・データサイエンス・AIに関する教材や指導法の開発
- ・全学的なデータサイエンス教育プログラムの実施・管理



研究 | データサイエンス関連研究の推進

医療分野、保健分野、社会科学分野等に、機械学習、深層学習をはじめとした最新の人工知能(AI: Artificial Intelligence)を応用することによる連携創出・学内におけるデータサイエンス関連共同研究の受け入れ

統計分析サポート

- ・統計的検定をはじめとした種々の統計リテラシーの普及啓蒙
 - ・学内の様々な研究活動における統計解析方法に関する相談対応
- ▶ 特色ある専門分野を持つセンター教員が相談に応じます

教員紹介は裏面へ

お問い合わせ

杏林大学データサイエンス教育研究センター
連絡先: cdser@ksot.kyorin-u.ac.jp
HP: <https://www.kyorin-u.ac.jp/univ/ds/>

詳しい取り組みは
こちらからも
ご覧になれます



	氏名	学位	専門
DSセンター 専任教員	センター長 坪下 幸寛 教授	博士（科学）	機械学習、深層学習、画像認識
	大森 拓哉 教授	博士（保健学）	教育工学、心理統計学
	吉田 清隆 准教授	博士（工学）	統計的データ分析、多変量解析
	西田 豊 講師	博士（人間科学）	多変量解析、心理統計学
	橋本 晃生 助教	博士（理学）	衛生動物学、医療統計
兼務教員 (保健学部)	山田 慎 教授	博士（学術）	物理学
	池田 一磨 准教授	博士（数学）	数学

最近の動向と実績

教育 | 全学部

文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」（MDASH Literacy）のモデルカリキュラムに準拠した動画学習コンテンツの作成・管理（全13編）
▶ 本学の学部横断的データサイエンス基礎教育プログラム「杏林大学データサイエンス標準教育プログラム」が、令和4年度文部科学省 MDASH Literacyに認定されました（認定の有効期限：2027年3月31日まで）。

研究

- ・眼炎症疾患におけるmicroRNAを用いた新たなバイオマーカーの確立¹（眼科学教室 慶野 博 教授との共同研究）
- ・肺がん液状化細胞診標本を用いたAIによる自動診断に向けた基盤研究*（呼吸器・甲状腺学科教室 田中 良太 准教授との共同研究）
- ・眼科OCT(Optical Coherence Tomography)画像の解析（眼科学教室 片岡 恵子 講師との共同研究）
- ・深層学習を用いた細胞診自動診断技術の獲得†,2（臨床検査技術学科 大河戸光章 准教授との共同研究）
- ・機械学習を用いたその他の医学研究³ ・教育工学・マーケティング分野に関する研究‡,4,5
- ・衛生動物の分類・生態に関する研究§,6

*第1回 杏林医学会研究助成金 医学部・保健学部共同研究助成金 「肺がん液状化細胞診標本を用いたAIによる自動診断に向けた基盤研究」

†科学研究費助成事業 研究活動スタート支援 「深層学習を利用した子宮頸がん細胞自動識別手法の確立」（課題番号：21K21320）

‡科学研究費助成事業 基盤研究（C） 「認知診断モデルによるバグの検出と適応型テストへの応用」（課題番号：20K03076）

§科学研究費助成事業 若手研究 「婚姻贈呈を介したメス内部生殖器の多様化機構に関する研究」（課題番号：21K15152）

参考文献

1. Saito S, Keino H, Takasaki I, Abe S, Kohno H, Ichihara K, Hayashi I, Nakayama M, Tsuboshita Y, Miyoshi S, Okamoto S, & Okada AA (2022) Comparative Analysis of Serum microRNA in Diagnosed Ocular Sarcoidosis versus Idiopathic Uveitis with Ocular Manifestations of Sarcoidosis. *International Journal of Molecular Sciences*, 23(18).
2. 坪下幸寛, 大河戸光章 (2022) 深層学習を用いた子宮頸がん細胞の自動分類. パターン認識・メディア理解研究会 (PRMU). 2022年5月.
3. Wang C, Li Y, Tsuboshita Y et al. (2022) A high-generalizability machine learning framework for predicting the progression of Alzheimer's disease using limited data. *npj digital medicine*, 5(43).
4. 大森拓哉・良峯 徳和・久保田 貴文 (2022) 数理的問題の基礎教育を補完するe-learning システムの精緻化と運用の検証. 経営・情報研究 (多摩大学研究紀要) 26: 245-248.
5. 大森拓哉・森一将 (2022) 食品表示の影響を考慮した清涼飲料水イメージの顔グラフ表現. 日本行動計量学会第50回大会. 2022年8月.
6. Hashimoto K, Tateno H (2022) Holarctic canthariphilous biting midge *Atrichopogon lucorum* (Meigen, 1818)(Diptera: Ceratopogonidae) in Japan. *Oriental Insects*, 56(4): 489-500.

教員からひとこと

坪下 幸寛 (データサイエンス教育研究センター長)



皆様初めまして。データサイエンス教育研究センターセンター長の坪下です。当センターではデータサイエンス教育の充実 / データサイエンス関連研究の推進 / 統計分析のサポートを三つの柱として活動を行ってゆく予定です。積極的にご活用いただければと思います。

さて、私の専門は人工知能 (AI)、機械学習で、特に近年は画像認識技術を中心に研究を行っています。医用画像を用いた研究も積極的に推進しており、過去には MRI 画像を用いたアルツハイマー病の進行予測 AI の研究を行っていました。現在は、子宮頸部の細胞診顕微鏡画像から子宮頸がん検診の自動分類を行う研究に携わっています。データは結構持っているし、AI にも興味はあるけど、どのように研究を進めたら良いかわからないという先生方、お気軽にお問い合わせ下さい。

大森 拓哉 (教授)



専門は教育工学、心理統計学、テスト理論、e-learning、ベイズ統計学、学生相談等です。人間の推論・学習・行動等について、データ分析と人工知能的アプローチによる支援システムの構築の研究を行っています。総合情報センターも兼務していますので、システム運用についてのご相談も承ります。公認心理師として学生相談にも携わってきましたので、将来的には学生のメンタルヘルスも含めた個別適応型支援システムの開発を行いたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

吉田 清隆 (准教授)



DSセンターの吉田です。数式を扱うのが好きで、多変量解析や数理統計学の理論的側面に興味を持っています。井の頭キャンパスでは、主に保健学部と外国語学部のデータサイエンス関連科目の一部を担当しています。医療統計にはあまり精通していませんが、アンケート分析等でお手伝いができると思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

西田 豊 (講師)

専門は多変量解析および心理統計学です。調査データに対する解析手法の理論と応用について研究を行っています。特にクラスター分析や主成分分析などに代表される、ラベルを持たない教師なしデータに対する解析手法に関心があります。

橋本 晃生 (助教)



私は昆虫の生態や進化について研究しています。山や川へ行き、虫たちを観察してみると、その奇妙な姿かたち、行動やその多様さにいつも驚かされます。そんな彼らの暮らしを生物統計という虫眼鏡で覗いてみたとき、今まで気づきもしなかった虫たちの本当の生き様が見えてくることにデータの力を感じています。

自然の動植物に関する共同研究はもちろんのこと、皆様の生物統計に関するご相談を心よりお待ちしております。

山田 慎 (教授)

保健学部臨床検査技術学科山田慎です。この度、データサイエンス教育研究センターを兼務することとなりました。私自身は、物理学、医用工学などを担当しており、データサイエンスの専門家ではありませんので、本流のところはデータサイエンス専門の諸先生にお任せするとして、課題のモデル化などのところでお役に立てればと考えております。よろしくお願ひします。

池田 一磨 (准教授)

保健学部作業療法学科の所属で、データサイエンス教育研究センターを兼務しています。専門は数学です。特に数学で使われている論理を記号を用いて数学的に研究する数理論理学と呼ばれる分野の研究を行ってきました。医学部での研究と重なるところは少ないとは思いますが、何卒宜しくお願ひ致します。

医学部教育を改善していくために、学生教務委員の意見やアンケート調査を介して、学生の皆さんの意見も参考にして、教務委員会などの担当部署で様々な課題を検討しています。

今回、昨年11月の総合試験前の6年生に、医学部教育の評価や要望についてアンケートを実施しました。各要望に関しては、教授会や教務委員会をはじめとする関係部署で検討していますが、ここではその中から、下級生や担当教員の参考のために、学部教育における不足事項と表現された結果を提示いたします。

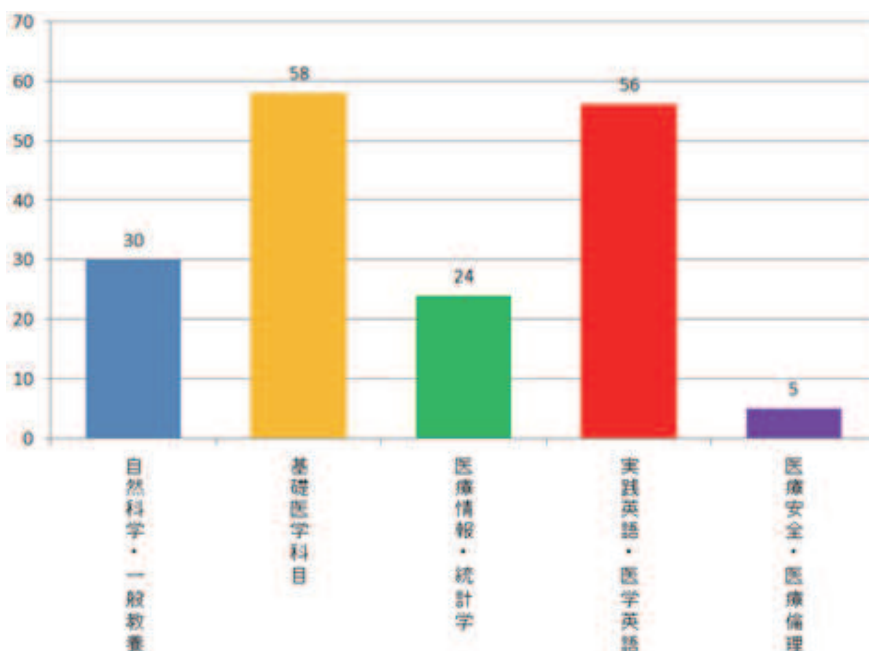
令和4年 医学部6年生を対象とした教育要求分析

学部教育・カリキュラムの評価と要望の傾向

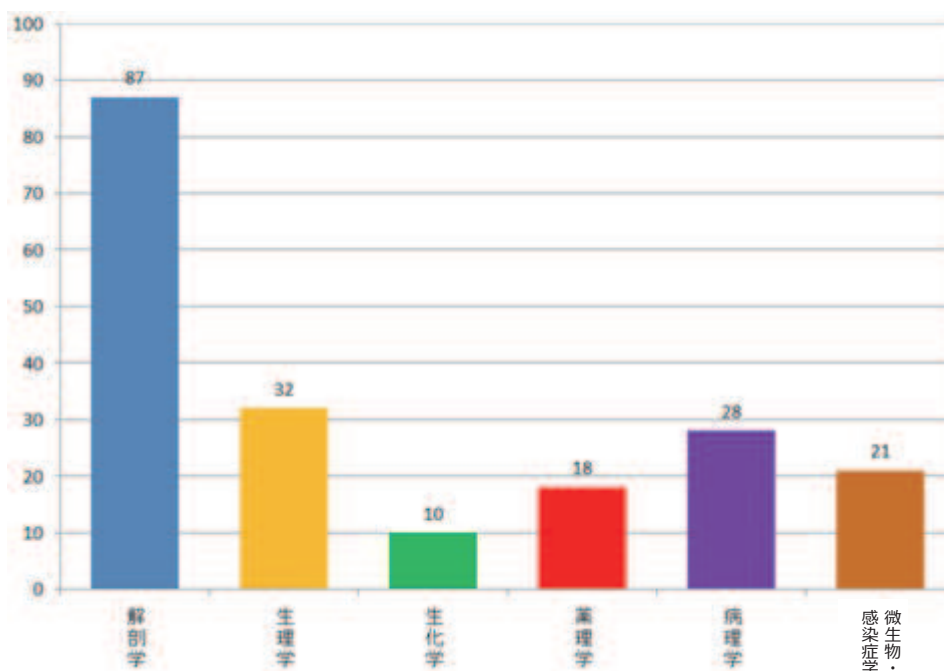
令和4年11月

学部教育における不足事項

「在学中にもっと学んでおけばよかった」と思う項目を2つまでの複数回答で問う設問に対する回答結果は下図の通りとなった。昨年度実施した調査と比較して、自然科学・一般教養の項目を選択する学生の割合が増加した点が特徴的であるといえる。

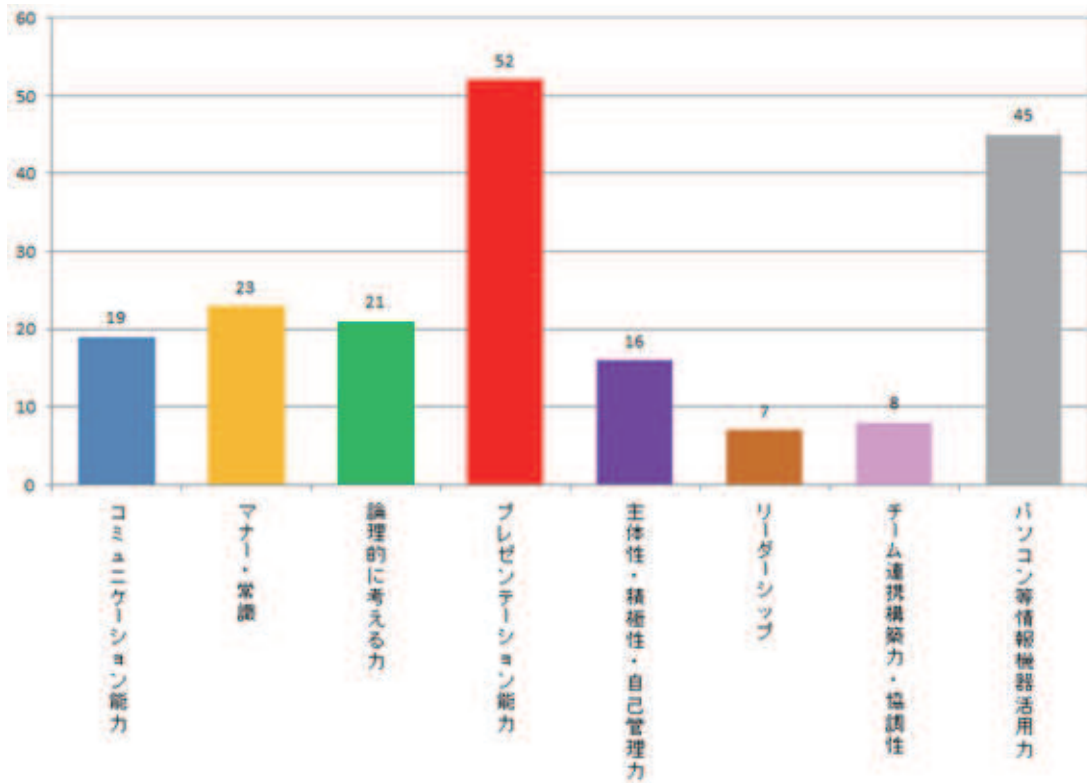


「臨床実習を終えた現在から振り返って、もっと学んでおけばよかったと思う科目」を2つまでの複数回答で問う設問に対する回答結果は下図の通りとなった。例年通り多数の学生が解剖学を選択する結果となっている。



「これまでの学部教育や活動を通してもっと身につけておきたかった」と思う項目2つまでの複数回答で問う設問に対する回答結果は下図の通りとなった。

プレゼンテーション能力や情報機器活用力の回答数が多い結果となっている。昨年度と比較して情報機器活用力を選択する学生の割合がやや高かった。



最後に

岸本先生の第3弾では、先生自身の初期研修や米国医療システムへの具体的な挑戦の様子が語られています。自分の実力を高めるために、自己目標をたてて、そのために自ら考えた計画を実行するべく最大限に努力された姿は、医学生だけではなく研修医の皆さんも刺激を受けると思います。どうぞ参考にしてください。

教室訪問では、呼吸器内科教室の様子が具体的に紹介されています。大学ならではの教育熱心な先生方が、臨床、研究、教育に生き生きと向かわれている様子が浮かんできます。

3か月前に発足したデータサイエンス教育研究センターには、さまざまな研究分野の先生方が在籍されています。臨床・基礎医学の共同研究や各教室の研究計画の相談など、医学部の皆さんには積極的に交流いただきたくお願いいたします。

昨年は、新しい医学部講義棟ができて、学習環境は改善しています。本年は、この環境をさらに生かして、教職員と学生の交流が益々盛んになるようお願いいたします。

(平形明人)